

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 41

学校名・団体名	岐阜市立柳津小学校
コ - ス	学校支援
活動・研究のテーマ	新たな価値を生み出せる子をめざして

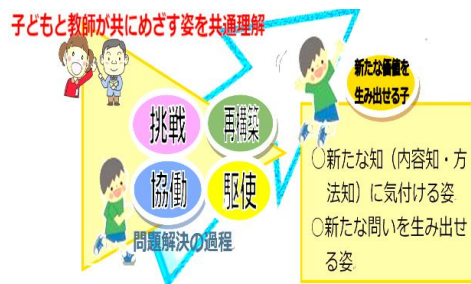
1. 研究の意義

平成32年度より全面実施される新学習指導要領が告示され、これからの社会を見通した様々な文献が出される中、私たち学校現場では、目の前の子ども達が大人になった時にどのような力が求められるか、小学校の中でどのような力を身に付ける必要があるのか議論を重ねた。「新たな価値」とは、「自分の中にこれまでにない、さまざまなものに対する値打ち」のことである。つまり、「新たな価値を生み出せる子」とは、「自分の中にこれまでにない価値を生み出せる人」である。変化の激しいこれからの時代には、様々な問題にぶつかることが容易に予想される。柳津小学校を卒業した子どもたちには、予測不可能な時代を、たくましく生き抜いてほしいと願っている。だからこそ、色々な情報や多様な考えを受け止めながら、自分自身をよりよい方向へと導くように、常に自分自身を更新する経験、新たな価値を生み出していく経験を積み重ねることが小学校6年間の役目であると考えた。

本校では、来年度行われる全国小学校理科研究協議会研究大会岐阜大会を見据え、理科を軸に置きながら、特別支援教育、生活科、社会科を通して、資質・能力改訂を具現していく授業作りを追究している。

私たちは、「挑戦・駆使・協働・再構築」すれば、新たな価値を生み出すことができると考えている。つまり、小学校では、学習の中で、「挑戦・駆使・協働・再構築」し、新たな価値を生み出すことを繰り返し経験していくことが大切なのである。そのために、小学校6年間の中で、問題解決の力を身に付けながら、その中で新たな価値を生み出す経験と、それらの有用性を自覚していくことが、本校の目指す「新たな価値を生み出せる子」へとつながっていくと考えている。

新たに研究主題を掲げ歩み出した今年度は、「新学習指導要領の目指す授業、子どもたちに身に付けたい力とは何か。」「これまでの学習の仕方と何が違うのか。」何度も議論しながら、実践を行った。



2. 研究報告

(1) 研究の内容及び実践例

「挑戦・協働・駆使・再構築」の視点で行う授業改善の方途は次の3つである。

- ①単元構想 ②やないづアイテムの活用と問題解決の力の育成 ③学びの自覚化

①単元構想

今年度の研究

- ・問題解決の力の育成に関連する他教科、他単元の資質・能力のつながりを明確にした。
- ・単位時間ごとに働かせる見方・考え方を明確にした。
- ・個の支援表・支援計画を作成した。(特別支援、生活科)

【4年「物の体積と温度」より】(7月)

質的・実体的な見方で、生活経験や既習と関係付けるという考え方を働かせて、資質・能力を育成することに重点を置き構想した。本単元では、温めると体積が大きくなる、冷やすと体積が小さくなることを、ただ理解すればよいのではなく、予想の段階で見方・考え方を働かせた根拠をもつことで、これまでに創られた、空気、水、金属の捉えを更新させていくことが大切である。そこで、単元の中で、子どもの考えの元となる根拠を表出できる時間を4回仕組み、子どもの思考に沿いながら、根拠ある予想を検証できるように単位時間ごとをつないだ。

②やないづアイテムの活用と問題解決の力の育成

今年度の研究

- ・ 学びに使う思考（見方・考え方）を教師が価値付け、「学びのアイテム」として教室に位置付けた。（学級ごとに担任が子どもと共に創っていった。）
- ・ 単位時間において、問題解決の力が身に付くように手立てを打った。（板書、学習環境、学習の掲示、発問など）



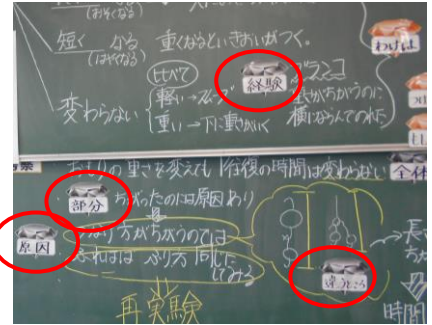
【価値づけ，位置づけている場面】

【各学級に位置づけているアイテム】



【5年「ふりこ」より】（2月）

「おもりの重さを変えると一往復する時間はどのように変わるだろうか。」という問題に対し、班ごとに方法を考え、実験を行った。これまで条件統一の考え方から、「同じにする条件・変える条件」から班ごとに方法を考え、実験を行った。この実験では、方法を発想する際におもりの吊るし方にまで教師が指導することがあるが、ここでは、結果の違いから子ども達自身が「アイテム」を使って結果の違いから方法を再検討する学習を意図的に仕組むことにした。子ども達は、実験結果から考察する際、班によって結果が違うことに気付いた。これまでに身に付けてきた考え方「どうして班によって実験結果が違うのか。」について子ども達が話し合う中で、「同じ結果になった班と、違う結果になった班の方法の違いがある。」と考え、それが結果の違いにつながっているのだから、おもりのつけ方も同じにして、条件を統一して再実験する必要があるということを見出すことができた。



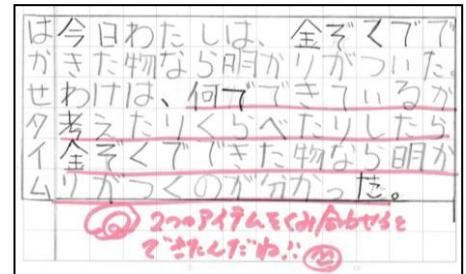
③学びの自覚化

今年度の研究

- ・ 学びの振り返りの場を位置付けた。
- ・ 自覚させたい思考や、学び方については、教師が価値付けを行った。
- ・ 「何ができたか、分かったか。どうしてできたか（分かったか）。次は…」の視点で振り返りを行った。

【3年「明かりをつけよう」より】（12月）

教師は、子どもの発言などから、本時働かせる見方・考え方を見取り、そのよさを価値づける。それによって、子ども達はその思考のよさを自覚できる。右に示した子どもの振り返りには、「金属でできた物なら明かりがつくことが分かったのは、「何でできているか」（質的な見方）をしたり「比べて考えた」（比較の考え方）を使ったりしたからだと振り返ることができた。



（2）成果と課題

◆成果

- ・ 単元を構想することにより、単元の出口、もしくは部研やプレ大会における本時まで、子どもがどのような資質・能力を身に付けておく必要があるかを、教師が捉えることができた。それを基に、他単元や前単元から指導を積み重ねることができた。
- ・ 「やないづアイテム」を子どもと共に作り、教室に位置づけていくことによって、問題解決するときには、どう考えればよいか、子どもが「やないづアイテム」を意識し、駆使する姿が多くあった。12月の問題解決の力の育成に関わる子どもの思考の調査からも、「学びのアイテム」が90.3%の子どもに定着している。
- ・ 「何ができたか（分かったか）、どうしてできたか」の観点で自分を振り返ることが、次の問題解決への意欲や、問題解決の力の育成、新しい発見の喜びにつながった。（ノートや子どもの発言より）
- ・ 教師の価値付けは、自己の学びを振り返る時に有効に働いた。
- ・ 自分の学びや、学んだことの変容が分かるように単元の振り返りカードを用いたりするなど、振り返り方を工夫することで、自己の変容に気付くことができる子が増えてきている。

◆課題

- ・ 「やないづアイテム」を整理し、どの学年でどのような「やないづアイテム」があるとよいか、系統性を明らかにして継続的に指導する。
- ・ 学びの自覚化が「新たな価値を生み出す」ための自信や力となるために、振り返りのしかたについての指導や、振り返った内容への見届けを行い、子どもが振り返りのよさを感じることができるようにする。